

ある時、私はおばあちゃんと商店へ出かけた。

私は、前へ前へと大きく、堂々と歩いていた。

商店にはとてもたくさん、それはもうたくさん色々な売場がある—果物、ありとあらゆるきゅうり、焼き菓子、キャンディー、卵、ソーセージ、お茶、それから人、人、人。

ふと後ろを振り返ってみると—なんと、おばあちゃんがない！

—おばあちゃん、私、ここ！—危うく耳が壊れて、聞こえなくなってしまいそうなほどの大声で叫んだ。

私は、その場に立ち止まらず前へと走りだした。

—おばあちゃん、私はここよ！—私は一層大きな声で叫び、一層早く走った。

—おばあちゃん、わた、私は、ここよ、ここ、ここ！—とうとう涙があふれ、立ち止まってしまう。

ようやくここで、おばあちゃんは私に追いつき、助けてくれた。実は、おばあちゃんはずっと前から私を見つけていたらしかった。私が大きく、足が速かったものだから、その時まで追いつくことができなかったらしい。